

〔博士論文概要〕

小学校中学年の体づくり運動における授業方法に関する研究 -大きなボールに乗る運動の補助を用いた学習展開-

令和3年度

田村元延

常葉大学短期大学部

国内において、子どもの“からだのおかしさ”の問題が指摘されてから久しい。その状況は、益々深刻な状況に陥っており、「動きの未習得」や「運動欲求の衰退」の問題にまで及ぶ。中でも、「転んでも手が出ない」とされる現在の子どもが抱える動きの問題は深刻であり、日常生活で不安定な環境に身を置き、バランスをとる動きやバランスを崩して転ぶ動きを経験する重要性が指摘されている。また、現行の学習指導要領では、将来に繋がる「生きる力」や「汎用的な能力」の育成を一層重視し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を求めている。

そのため、本研究では、小学校体育の体づくり運動系の領域において、中学年で例示されている大きなボールに着目した。この用具特性を利用することで、体のバランスをとる動きに加え、バランスを崩して転ぶといった動きの経験が可能となる。さらに、バランスを崩すことは児童にとっても楽しく遊び感覚で学習に取り組めることにも注目した。しかしながら、不安定な環境での運動は、安全への配慮も不可欠である。特に多様にバランスを崩して転ぶ中には、危険な転倒が想定される。大きなボールに関する先行研究の調査においても、小学校中学年を対象とした授業実践は行なわれているものの、その実践例は少なく、動作習得、転倒動作、さらには指導方法に関する知見が乏しいことが明らかとなった。そのため、安全を確保しながら積極的に学習を促進させる補助に着目して、指導方法を検討していく必要性が考えられた。

こうした現状を踏まえると、大きなボールを教材として活用する上で、想定される危険な転倒に加え、動きの習得や楽しさを含めた従来型の指導方法の実態を把握することが必要である。そして、危険な転倒を見極め、排除する手段として補助を用いた段階的な指導方法を考案し、授業実践を通して、その効果を検証することが重要といえる。

そこで、大きなボールに乗る運動を教材として、体づくり運動の授業実践で活用するために、補助を取り入れた指導方法を構築することを目的とした。この目的を達成するために、3つの研究課題を設定した。

研究課題Ⅰでは、大きなボールに乗る運動の課題に1人で取り組む従来型の指導方法の実態を明らかにすることを目的とした。従来型の指導方法を取り入れた単元を試案し、授業実践を通して、ボール上でのバランス測定、転倒実態調査、授業の内省調査を行ない、ボール上でのバランス能力、安全性、授業評価から実態把握を行なった。

以下にその結果を示す。

- 1) 転倒実態調査では、臥位ローリングや座位バランスの学習活動中にボール上から積極的にバランスを崩して多様に転倒する状況が確認された。その中で特に、座位バランスでは、後方へ肩部から着床する危険な転倒の実態が明らかになった。

- 2) ボール上でのバランス測定では、静的なバランス能力の向上が認められた一方で、動的なバランス能力の向上は認められなかった。
- 3) 形成的授業評価における「意欲・関心」次元の「楽しさの体験」項目や「学び方」次元の「自主的学習」項目の評価が高く、大きなボールに乗る運動を教材として用いた授業は、児童が楽しく主体的に学習に取り組める評価を得た。

研究課題Ⅱでは、従来型の指導方法の改善点を明らかにし、幫助を取り入れた段階的な指導方法を考案することを目的とした。

以下にその結果を示す。

- 1) 従来型の指導方法において、重心の高い課題では、危険な転倒が生じる可能性が明らかとなり、児童自ら安全を確保して学習に取り組むために幫助を用いた指導方法を考案した。
- 2) 従来型の指導方法では、児童自らボール上での歯車動作の連動性や動き方を探る学習の促進が困難であった。そのため、学習の導入段階で他者と協力する直接的幫助法や支柱とロープを使った間接的幫助法の課題を取り入れた指導方法を考案した。

研究課題Ⅲでは、研究課題Ⅱで考案した指導方法の効果を検証することを目的とした。考案した幫助を取り入れた段階的な指導方法を用いた授業実践を通して、ボール上でのバランス測定、転倒実態調査、授業の内省調査を行ない、バランス能力の向上、安全性、授業評価から指導の効果を検証した。

以下にその結果を示す。

- 1) 学習時の転倒実態調査から直接的に頭部や肩部から着床する危険な転倒場面は認められず、安全に学習できることが確認された。
- 2) ボール上でのバランス測定から、授業実践を通じてボール上での静的及び動的なバランス能力の向上が認められた。
- 3) 形成的授業評価における「意欲・関心」次元の「楽しさの体験」項目が高い傾向を示し、児童が楽しく学習に取り組める授業評価を得た。

以上のボール上でのバランス測定、転倒実態調査、授業の内省調査で得た結果から、従来型の指導方法と幫助を取り入れた指導方法を比較し、安全性、動きの習得、楽しさの観点から幫助を用いた指導方法の効果を明らかにした。

両指導の転倒実態調査において、ボール上から多様な転倒状況が確認された。その中で従来型の指導方法では、座位バランスの学習時に、後方に肩部から転倒する事例が確認され、危険な転倒の実態が明らかとなった。特に1人でボールに乗った状況では、児童自身で後方への落下を防ぐことや動きの中で背面からの転倒を回避することは困難といえた。この実態を受け、座位バランスでは、学習導入時から直接的幫助法に加え、間接的幫助法を取り入れて単元を構成した。その結果、研究課題Ⅰで確認されたような危険度の高い転倒の発生は認められなかった。中でもロープを用いた間接的幫助法の課題では、学習者自らの感覚に従いロープを操作しながら、バランスの崩れや後方向への危険な転倒を回避する対応が確認された。さらに、自らの判断でロープを緩めたり、離したりして幫助を調節しながら、自立的にバランスをとる状況が観察された。この取り組みから、間接的幫助法の課題は、ボール上で動き方を自ら探り、徐々に自立を促す役割を担うことが考えられた。

また、ボール上でのバランス測定では、従来型の指導方法において姿勢を移行させる動的なバランス

能力の向上は認められなかった。この結果は、ボールが大きく転がる状況に対応して動くことが児童にとって困難であったといえる。そのため、臥位ローリングでは、学習の導入段階で幫助者が学習者の頭部側から手を繋ぐ直接的幫助法の課題を用い、身体とボールの回転を連動させる歯車動作の発生を促進させることに重点を置いた。また、幫助による指導を最小限にし、幫助を外した状況で歯車動作の学習を促す道筋を立てた。その結果、直接的幫助法の課題では、学習者が徐々に反転を行なうことが確認されると共に、幫助を外した学習段階において積極的に転ぶことが確認された。その中でも、数多く転倒を経験した児童ほど姿勢を移行させる動的なバランス能力の向上が認められた。

さらに、授業の内省調査において、両指導を用いた授業実践では、児童が楽しく学習に取り組む授業評価を得た。この結果から、大きなボールに乗る運動は、児童が楽しく学習に取り組める教材として活用できることを示したといえる。

これらの結果は、主体的・対話的な学びの視点から直接的及び間接的幫助法の課題を考案し、学習の導入段階で取り入れたことで、児童自らボール上での試行錯誤を引き出し、自立して大きなボールに乗る動きを安全に習得する深い学びの実現に貢献する可能性を示したといえる。

以上を総括すると、大きなボールに乗る運動の教材を活用する上で、幫助を用いた指導方法を取り入れた結果、以下の知見を得ることができた。

- 1) 不安定な環境を作り出す大きなボールに乗る運動は、多様にバランスを崩して転ぶ状況を作り出し、楽しく学習に取り組める教材であることが示された。
- 2) 重心位置の高い運動課題では、学習の導入段階で安全性に重点を置いて幫助による指導を行なったことで、児童自ら危険な転倒を回避して学習に取り組める安全な学習環境を実現した。
- 3) 重心位置の低い運動課題では、学習を促進させる幫助を中心に指導を行ない、幫助を最小限に設定したことで、児童は多様にバランスを崩して転ぶ学習を促進させ、数多く転んだ児童ほど姿勢移行を伴う大きなボールに乗る動きの習得に貢献した。
- 4) 大きなボール上から多様に転倒しながら、自立的に大きなボールに乗る動きを安全に習得させた幫助を取り入れた段階的な指導方法は、児童自ら試行錯誤しながら課題を解決する深い学びの実現に繋がる可能性を提示した。

こうした本論文の知見は、「転んでも手がでない」という動きの未習得を抱える子どもに対して、不安定な環境に身を置き、他者と協力しながら、多様にバランスを崩して転ぶ中で自ら動き方を学ぶ重要性を改めて示すものといえる。また、運動欲求の衰退が指摘される子どもにとって、不安定な環境の中でバランスを崩して転ぶイリンクスの経験は、子どもの運動への主体性を喚起し、自ら動き出す教材としての可能性を示したといえる。この主体的・対話的な学びの視点を踏まえた指導方法の工夫は、不安定な環境で試行錯誤を重ねる中で、子ども自ら動きの未習得や運動欲求の衰退といった問題を解決していく深い学びの指導に関するひとつの在り方を示したといえる。つまり、大きなボールに乗る運動のように子どもたちの身体や心を揺さぶる教材が、体づくり運動において子どもの“からだのおかしさ”を改善し、将来的に「生きる力」や「汎用的な能力」を育む上で重要な役割を果たすと期待される。